2024年度

第8回NUFS&NUAS
読書コメント大賞
受賞作品

第8回 NUFS&NUAS
読書コメント大賞
結果発表

大　賞	和毛 さん	外大 ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙﾋﾞｼﾞﾈｽ学科
最優秀賞	fog さん	学芸大 ﾌｧｯｼｮﾝ造形学科
図書館特別賞	阿漕 さん	外大 国際日本学科
出版会賞	Y/A さん	外大 国際日本学科
優秀賞（順不同）	雲 さん	外大 現代英語学科
	るな さん	外大 フランス語学科
	ぷわ さん	外大 国際日本学科
	book mark さん	外大 国際日本学科
	こっぺぱん75 さん	外大 世界教養学科
	ボーペンニャン さん	外大 現代英語学科
いいね!賞（一般投票）	chaoyin さん	外大 英米語 英コミ専攻

大賞

『安楽死を遂げるまで
：the road to euthanasia』 宮下洋一

ペンネーム：和毛 （外大 グローバルビジネス学科）

人生をマラソンに例える人は多いだろう。誕生をスタート地点とするなら、ゴールは死だ。人生という名のマラソンを走る私たちは、本来ゴールテープがどこにあるのかを知ることができない。この本はゴールテープの位置を決め、自らの手で切った人たちの話だ。

様々な苦痛を抱える人が自殺ほう助団体を訪ねる。その団体の代表は彼らの死に際に「美しい」という言葉を用いた。しかし、本を読む私の目に浮かんだ涙は純粋なやるせなさからだった。残された選択肢は死のみという彼らの覚悟に対して、傍迷惑にもまだ生きていた方が幸せだったかもしれないとそう考えてしまったのだ。こんな生に対するバイアスが私を含めた、死より辛い苦痛を感じたことのない人間に憑りついているのだろう。重いからこそ日常ではあまり考えない「命」。人生百年時代、病棟で寝たきりになるかもしれない我々に安楽死制度は重要なテーマであるということをみなさんに知っていただきたい。

最優秀賞

『キッチン』 吉本ばなな

ペンネーム:fog（学芸大　ファッション造形学科）

なぜこの本のタイトルは「キッチン」なのだろうか。

わたしはこの問いを常に考えながら物語を読み進めていた。

まず、これほど繊細かつエネルギーを感じられる文章には今まで出会ったことがなかった。家族、愛、孤独、やさしさ。そんな単語だけでは言い表せないほど、この物語は透き通っていて、美しく、そしてあたたかかった。「この人の文章は水のようにわたしの中に入ってきて、やがて血液となって全身をめぐっていく」と思ったほどに言葉の全てが自分の一部になるような感覚だった。

人間はすぐに他人との関係に名前を付けたがる。自分と相手との関係に名前が無いと不安になってしまうのだ。しかし、この本におけるみかげと雄一の「家族でも恋人でもない関係」が生み出す安らぎに触れて、名前のない関係は悪いことではない、と思えた。タイトルの「キッチン」とは何か。その答えを見つけた時、あなたはこの物語をより身近に感じられるはずだ。

図書館
特別賞

『おちくぼ姫』 田辺聖子

ペンネーム：阿漕 （外大　国際日本学科 ）

いつの時代も乙女の憧れは、ピンチに必ず駆けつけてくれる頼りがいある王子様。そんなの夢の国にしかいないって？いいえ、日本文学を侮る勿れ。日本にもいるんです。しかも平安時代に。白馬ではなく牛車に乗った、王子様ではなく少将ですけれど、聡明な貴公子であること請け負い。

本作は「日本版シンデレラ」とも呼ばれる古典『落窪物語』を原典とする、継子いじめの物語。愛らしい姫様が麗しの貴公子と幸せになる、まさにシンデレラストーリー。加えて、シンデレラでは描かれない「めでたしめでたし」のその先、少将からの逆襲まで描かれていて爽快感マックスです。

難しい古典作品を、誰でも楽しめる現代文学に作り替えてくださるのが故・田辺聖子先生。高校時代に古典が苦手だった人でも、きっと楽しめます。

「ボーダーレス」の言葉のもとに、国境を越え、さまざまな作品に出会える昨今。あえて「時代」を超えて、千年前の日本を覗いてみませんか。

出版会賞

『目の見えない人は世界をどう見ているのか』

伊藤亜紗

ペンネーム:Y/A（外大　国際日本学科 ）

――知ることは変身することである――

確信とともにこう語る著者は、視覚障害者との対話を通して想像力を働かせ、彼らの見ている世界を見ようと試みる。それは例えるならば、椅子の四本脚のうちの一本がないという「欠如」ではなく、三本脚が作る「全体」の世界。

見えるからこそ、死角ができる。見えたイメージに固執してしまう。見える人が実は見えていないかもしれないこと、見えない人の方が実は柔軟に見ているのかもしれないこと――。

見える人として生きてきた私の世界の捉え方が根底から揺れ動く。見えることに胡坐をかいて、本当に「見る」ことを避けてきたのではないか。想像力を伴って知ろうとすることを放棄してきたのではないか。

ぐらぐらと揺れる視界の中で、世界を捉え直す。それこそが、異文化理解への第一歩だと信じて読み進める。思索の止まらなくなる読書体験を、あなたにも。

優秀賞

『硫黄島上陸:友軍ハ地下ニ在リ』

酒井聡平

ペンネーム:雲（外大　現代英語学科）

日本は良い意味でも悪い意味でも平和ボケした国である。この本にはこのことを本当に実感させられた。政府は都合の悪いことは隠蔽し、社会は見て見ぬふり。被害者など一部の人が声を上げるが誰も見向きもしない。戦争もその1つである。

来年8月、戦後80年目を迎え、戦争は歴史上の出来事だと思っている若者も少なくはない。私もその1人であった。しかし、終わったことだと学校で知識を学ぶだけで本当によいのだろうか。

太平洋戦争末期で前線となった硫黄島での戦死者は2万人。うち半数が今もなお見つからない。けれど、遺骨収集団の派遣は減る一方。死を知りながらも国や家族のために戦った勇士を忘れ去ってしまうことほど虚しく悲しい終わりはない。

ある消防士は「遺族にとって何も帰らないことほどつらいことはない」といった。どんなに小さな声でも1人1人が声を上げることで、家族のもとに帰ることができ報われる人がいるのではないだろうか。

優秀賞

『舟を編む』 三浦しをん

ペンネーム：るな（外大　フランス語学科）

「辞書は言葉の海を渡る舟だ」この言葉にはっとした。私は普段何気なく発している言葉の意味や使い方を正しく理解しているのだろうか。急に自信が無くなり同時に恥ずかしくなった。

近年では毎年のように新しい言葉が生まれては流行しており、いわば言葉は常に変化していく生き物の様である。だが、いつの時代も人に何かを「伝える」ための手段であったことだけは変わらないだろう。例えば「やばい」とはなにがどのように「やばい」のだろうか。相手にきちんと「伝える」ことの重要性は外国語を学んでいる私にとって、心にとめておくべきことだろう。と、考えるきっかけとなったのは15年もの間、辞書の編纂に奮闘し続けた玄武書房辞書編集部の者たちだ。彼らの性格は面白いほど違っているが、「舟」の完成という同じ目標がある。度々刊行が頓挫しそうになるのだが、その度に地道な作業と情熱で持ちこたえた。私は彼らの編んだ舟に乗りたいと心から思えた。

優秀賞

『みどりいせき』

大田ステファニー 歓人

ペンネーム：ぷわ（外大　国際日本学科）

表紙を開いた瞬間から今までずっと悔しさが消えない。私には、こんなに人を惹きつける言葉を紡ぐ才能がない。

「みどりいせき」。まるで危険な薬物みたいな、強烈な中毒性のある小説だった。

最近よく聞く闇バイト。私には無関係で周りもたぶんそんなものには手を染めてないと思う。主人公の桃瀬もきっと同じだったはずだ。

悪いことをするときの背徳感がかえって高揚感を生む瞬間。けれど、ふと湧き上がるこれでいいのかという不安と焦燥感。そんな感覚が私にはわかる。桃瀬はどこか私自身と重なるところがあるのかもしれない。

この本の怖いところはそれだ。ずっと大人の、それこそこの本に出てくる「チル」や「キャパい」みたいな若者言葉の意味をいちいち調べないとついていけない人たちにはわからないかもしれないけれど、それがわかる私のような若者にとっては、これは他人事ではない。一度読んで確かめてみてほしい。

優秀賞

『汝、星の如く』 凪良ゆう

ペンネーム：book mark （外大　国際日本学科）

もしあなたが妻なら、夫の浮気を承認できますか？
この本は「月に一度、私の夫は恋人に会いにいく」という衝撃的な書き出しから始まる。不穏な空気を纏って始まり、儚く星のように美しい愛で幕を閉じる。

凪良ゆうさんの『汝、星の如く』に出会うまで愛とは何か、よく分かっていなかった。この物語には沢山の、様々な形をした愛が詰め込まれている。登場人物のほとんどは血が繋がっていないのにも関わらず、だ。愛とは、人生とは、血の繋がりの有無だけなのか？出会いと別れ、その全てを愛しく抱きしめたような作品だ。

瀬戸内海での閉ざされた島での暮らしとそこで悩まされる人間関係の窮屈さ、対照的に目の前に広がる海の開放感、自由な思想。島と海の2つから織りなされるそのドラマに、スマホの存在を忘れるほど釘付けになった。生きることの自由さと不自由さ、充実と欠落、この作品からしか得られない感情に、10代のうちに出会えたことを幸せに思う。

優秀賞

『賭博者』

フョードル・ドストエフスキー（ 亀山郁夫訳）

ペンネーム：こっぺぱん75 （外大　世界教養学科）

愛、憎悪、嘲り、喜び、怒り、悲しみ、錯綜、狂気。人間の欲望が渦巻く舞台の名は、ルーレッテンブルグ（ルーレットの町）。いっそ実在したのではないかと思えるほど人間味に溢れる登場人物たちは、衝動にかられ、刹那的に行動する。醜くも輝かしい彼らの在り方は、引き込まれるほどに魅力的だ。その上、まるでその場にいるかと錯覚するような濃密なカジノの描写は、さらに強く、人間の欲望を私たちの心に刻み込む。そして物語は、遺産の被相続人であり、危篤状態のはずだったアントニーダおばあさんの登場から一気に加速し、事態はまさしく混沌へと突き進む。二転三転する展開はまさに人生のように予測不能で、決して目を離すことができない。人間の欲望は斯くも複雑で、面白く、終わることを知らないと、この作品は私に思い知らせてくれた。金に群がり、賭博に溺れ、欲望と運命に翻弄される人間の面白おかしさをぜひご照覧いただきたい。

優秀賞

『世界を無視しない大人になるために 僕がアフリカで見た「本当の」国際支援』 原貫太

ペンネーム：ボーペンニャン （外大　現代英語学科）

「僕は、世界を無視しない大人になりたい。」今までこの言葉に、何度も戻ってきた。原貫太さんが本書を執筆したのは大学4年生の時である。アフリカの子ども兵は、戦うことしか教えられてこなかった。小型武器を握りしめた過去の記憶を内に抱え、連続性の中で生きる。子どもは「消耗品」であり、国際社会は正当化し続けていいのか。言語化することをためらうほどの光景と、原さんのことばを追いながら、世界の不条理の中にいる自分を少し外から捉えた。私は初めて最貧国と呼ばれる国を訪れた後、張り裂けそうな感情を消化しきれないまま、悶々とした想いを抱えていた。その答えを見つけるように、4年間の学びと向き合ってきた。平和ボケしたここにいると、「世界を無視しないこと」を内側で肯定し続けてくれる何かを探したくなる。たまたまここで生きて、大学という宝箱で学ぶ特権を得た私は、確かにある限りなく小さな声に耳を傾けられる大人でありたい。

いいね！賞（一般投票）

『人魚の眠る家 』 東野圭吾

ペンネーム：chaoyin
（外大　英米語学科英語コミュニケーション専攻）

子供の脳死、臓器提供といった重いテーマだったが、自分だったらどうするかと非常に考えさせられた。目を覚まさない愛娘を、機械を使用して動かし、満足気に自慢する母の行為を「母の狂った愛情」と帯紙では表現されているが、私には到底狂っているとは思えなかった。例え目を覚ます可能性が限りなく0％に近くとも、呼吸している娘を死んでいるとは思えないだろう。また、頭ではわかっていても、自身の心が「目を覚ますのではないか」という希望を手放せないでいるだろう。娘が目を覚ました時に他の子達と遜色なく動けるように、と願って諦めない母の行為は、紛れもなく誰にも否定できない真の愛情に違いない。ドナーを待つ子供らのために臓器提供を選択すべきだ、なんて他人事のような声はかけられない。人の死や愛情、駆け巡る利己的な思考と世論としての「善」に阻まれながら動く登場人物らの心情がとてもリアルな作品だった。